

第136号

2022年6月1日発行

千葉大学教育学部
同窓会

〒263-8522

千葉市稲毛区弥生町1-33



変わる学びのスタイル

同窓会副会長 重 栖 聡 司
(S 52・3 卒)

新型コロナウイルスは学校教育にも大きな影響を与え、対面授業が当たり前だった学校に様々な学びの選択肢を求めた。

次の時代に活躍できる人材を育てるには、その時代に適した学びを提供することが必要であり、授業の在り方と学びのスタイルを改めて問い直す、今がまさにその時と言えるかも知れない。

社会の変化に伴って学びのスタイルが多様化したひとつの例として、通信制高校の例がある。

通信制高校は、働きながら高等教育を受けられるとの「教育の機会均等」を図る目的で生まれたものであるが、当初の役割を既に終え存在価値もなくなっている。

近年、全日制・定時制の生徒数が減少傾向にある中で、通信制課程の生徒数は増加傾向にあり、一昨年二十万人を突破した。

本年四月、広域通信制高校「ヒューマンキャンパス



吉兆墨

(HC)のぞみ高等学校」が茂原市に開校したが、私はその開校準備に昨年から関わってきた。

HCのぞみ高校では、高校卒業資格を目指しつつ、自分の夢を叶えるための練習やレッスンが可能で、プログラミング、メイク、ネイル、イラスト、ダンス、医療、アニメ、声優、タレントなど様々な専門コースを学ぶなど、全日制の高校では体験できないことに取り組み組んでいる生徒が通っている。高校の学習とともに、自分が興味を持つ分野について自由に学ぶことができるのは、通信制高校の大きな特徴であり、これからの学習スタイルの一つと言える。

自由な学習システムと柔軟な受

創立150周年同窓会記念誌「師道」

有償頒布申込受付期限延長！

教育学部創立150周年同窓会記念誌「師道」がまもなく完成します。「師道」は、50名の卒業生による学生時代の生活や学部の様子を紹介、同窓会活動の状況、約250枚の写真で見る学部の今昔などが掲載されています。



現在、頒布価格1200円（送料込み）で購読予約を受け付けており、締め切りは令和4年12月末日です。

希望者は郵便局で「払込取扱票」に住所、氏名、卒業年月を明記して、下記の口座に振り込みをしてください。

口座記号・口座番号：0170 8 299425

加入者名：千葉大学教育学部同窓会

け入れ態勢を持つHCのぞみ高校は、学校教育に「外の風」すなわち変化する社会の動きを取り込み、世の中と結びついた学習等を

提供しながら、一人一人が未来を切り拓き、世界を舞台に活躍できる人材を育てられるよう、日々挑戦していきたい。

紙面紹介

特別寄稿	6面
学校現場から	2面
学校現場へ	3面
会員のいきいき だより	4・5面
私の学園生活	7面
卒業を迎えて	8面
現役の学生から	8面
読者の声	9面
我が学舎の今昔	9面
海外の教育施設から	10面
支部だより	10面
新入生の声	11面
事務局より	11面
物故会員	11面
同窓生の美術館	12面
編集後記	12面

特別寄稿



ピンク色の積乱雲

健康社会学者・気象予報士

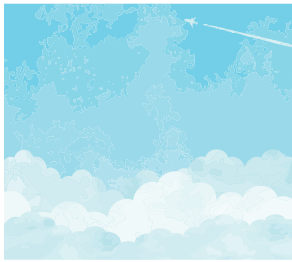
河合 薫
(S 63・3卒 東京都)

空を飛び、空模様を予想し、心模様を研究するようになるだなんて、学生時代の私は夢にも思わなかった。しかも、博士課程在学中に中学理科の教科書の編集委員を依頼されたのだから、人生とは全くもって「まさか」の連続である。出版社の担当者曰く「理科嫌いが増える中学生には独創的な視点が教科書に必要だ」とか。私の風変わりなキャリアも、独創的と評されるのとたちまち深みを増すのだから、言葉とは、実に面白い。

教科書作りは想像以上に難しかった。カオスと切っても切れぬお天気の世界では、理論通りの天気図一枚見つけるにも骨が折れる。学習指導要領で「教えていいこと・ダメなこと」が決められているため、中学生の好奇心をくすぐりそうな気象現象も範囲外になりかねない。一方、今どきの教科書は写真やコラムをふんだんに盛り込むことが可能だ。気嵐、竜巻、宇宙から見た地球の大気など「な

にこれー」と目をまん丸にする子供を思い浮かべて、資料探しに奔走した。私自身、小四の時にアラバマで見たトルネードやCAの時にコックピットから見た「ピンク色の積乱雲」がいまだ脳裏に焼き付いている。後に入ったお天気の世界で、あの美しかった積乱雲がゲリラ豪雨や突風、竜巻など気象災害の元凶だったと知り、美しさと恐怖が紙一重の自然界に魅せられた。一枚の天気図が、一枚の写真が、子供の未来につながると思うと、絶対に妥協できない。そんな大人からの熱い思いが教科書の隅々まで蜘蛛の巣のごとく、張り巡らされているのである。

今の子供は「考える力が不足している」と言われている。しかし、大人たちはどうなのか。そもそも「考える」とはどう



いうことを意味するのだろうか。

『考えるヒント』の著者小林秀雄は、「物を考えるとは、物を掴んだら離さぬという事」と説いた。なぜ、雲は空に浮かんでいるのか？を考えるなら、雲粒が何でできているのか、なぜ白く見えるのか、雲はどこまでできて、どのように消えるのか？を、なぜなぜ坊やのように問い続けることだ。知識を広げ、脳内のお猿や狸やウサギたちと「あーでもない、こーでもない」と議論し、それを他者に伝える言葉に変換するプロセスこそが、考える作業と言えよう。それは自分を丸裸にする行為であり、不完全な自分との仁義なき戦いでもある。この「知の遊び」の積み重ねこそが幸せな人生につながるのだ。

ところが、学校という組織は「考える」ことを用意された答えにたどり着くまでのプロセスと勘違いしているらしい。「知の遊び」を教科書に入れると、現場の先生から「答えがないと成績がつけられない」とクレームがくる。「情けない」といつてしまうと身も蓋もないが、それが今の日本社会の実である。

むろん私自身、考えることの真意を知ったのは社会に出てからだった。特に大学院で学問にどっぷり浸った経験は大きかった。学問に王道はないことを学び、勉強との違いにも気付かされた。勉強とは誰かが作った野菜を集め、サラダにして盛りつけること、かたや学問とは、どんな野菜を育てるか？から始まり肥沃な土地を選び、早魃や霜から守る方法を学び、収穫し、自分の言葉に置き換えられてやっと「おいしいサラダ」になる。世間ではこれを「自由な発想」とか「創造性」と呼んでいるに過ぎない。その根底には多種多様な分野の基礎知識と、自分の信念を貫く力と、誰からも学ぶスポンジのような柔軟さが求められる。学問の追究は、人間的に成熟する過程なのだ。

千葉大学には「効率命の世間」に惑わされず、学問する場であり続けてほしいと心から願う。当時の私はとんだ劣等生でお恥ずかしい限りだが、西千葉の広大なキャンパスと自由な空気が、今の私の土台になっているのだから。

※元ANNA客室乗務員、東京大学大学院博士課程修了(学術博士)

同窓生の美術館

雑
感



嶋口 章子

(S 54・3 卒
船橋市)

高校卒業後、国語と書道の教員を目指して教育学部に入學した頃、今のような書道漬けの日々が来ようとは想像もしていなかった。しかし、未だに思うようには書けない。最近、展覧会の作品を見ては「あれは良い」「これも良い」とつぶやいている。「良い」と

感じる幅が大変広くなったように思う。昔ならば立ち止まらなかったであろう作品を前にして、しみじみ「ああ、いいなあ」と感じるようになってきた。これが年をとったということなのだろうかとも思う。しかし、反対に自分の書きたいと思う、目指すものは揺るがなくなっている。それだけにそのように書けていない自分が歯痒い。目指すところは、文字性を失わずに静かに深く豊かに「存在すること」を具現化するような作品。いつか書けるだろうか。いつか書きたい。



「淵黙雷声」
53cm × 300cm



陶淵明「帰園田居」

180cm × 300cm

編★集★後★記

コロナ感染が三年目に入り、オミクロン株により全国的に猛威を奮い、いつ終息するか心配である。また、ロシアがウクライナに侵攻し、多くの死者・難民が増えていつ平和に戻るか心配である。この広報が発行される六月には、二つの心配がなくなることを願っている▼「十年ひと昔」と言うが、私も編集委員に就き十年目、現編集委員の中で最古参となる。この間たくさんの方々の玉稿に出会い、楽しませていただいた。また、紙面も大きく変化してきた。全面カラー化により、「同窓生の美術館」はじめ見やすい紙面になり、また内容も充実してきたと自賛している▼編集委員会の最後に、「特別寄稿」の話になる。「この人に書いてもらえるとありがたいね」等々。その中の一人に、長い間、候補に挙がっていたのが気象予報士の河合薫さんである。古山編集長の高いアンテナと執念が実り、今号に登場していただいたこと、編集委員の一人としてもうれしき限りである▼今後にも会員の皆様に喜ばれる会報作りに努めていきたい。

(文責 高津 乙郎)